

ポストモダン小説における都市空間

——デリーロ、オースターそして SF——

上西哲雄

Introduction——発題の概要

1960年代の小説を中心に第二次世界大戦後のアメリカ合衆国の郊外化の表出を巡って論を展開された早瀬氏の発題に続いて、本発題は1985年に発表されたDon DeLilloの郊外小説*White Noise*を、同年に刊行されたPaul Austerのニューヨークはマンハッタンを舞台にした*City of Glass*を補助線に、さらには前年に出版されたSF小説*Neuromancer*とそれにまつわる科学技術の発展の歴史をからめながら検討した。

(1) 郊外小説としての*White Noise*の物語

Don DeLilloの*White Noise*の物語は、死への恐怖を軸に語られる。主人公ジャック・グラドニーと妻バベットは日常的に死を話題にする。ジャック・グラドニーは大気汚染事故の健康への影響が、事故そのものの情報も含めてテレビ、ラジオ、人々の噂が飛び交う中で、自らの健康影響検査で、異常な数値が出たことがきっかけで死への恐怖が顕在化する。妻バベットは、もともと抱いていた死への恐怖から、タブロイド紙に載っていた死への恐怖を拭き去るといふ投薬実験募集の宣伝に応募し、モテルに連れ込まれるという事態に発展する。そこで浮き彫りになるのは、様々な事柄の認識、把握、理解の多くが、そうしたテレビやラジオ、広い意味では噂話も含めた、様々なメディアを通してということである。現実把握は、そうしたメディアが立ち上げる、いわば仮想現実を現実とする認識であることを、読み進めるうちに感じさせられる。

(2) *Neuromancer*の描く仮想空間

*White Noise*出版の前年1984年に刊行されたWilliam GibsonのSF小説*Neuromancer*は、コンピュータが作り出す仮想の世界に脳とコンピュータを直結して入り込み、そこで様々なドラマが展開するというものである。このように、現実の空間以外にエレクトロニクスによって作られる空間が存在するという世界観は、テレビやラジオで人々が仮想する空間が、科学技術の発展によってさらに進化したものといえる。*Neuromancer*はSFだけに、当時としては未来の技術、要するにインターネットを土台とする仮想空間を描いて見せたが、ほぼ同じ時期に発表された*White Noise*とは、仮想空間を問題としているという意味で、その世界観にはかなり近いものがある。インターネットは、ここで言及する小説群が登場する直前の1982年には、世界規模で相互接続するための標準プロトコルTCP/IPが開発されて、今のインターネットの基盤が出来上がったとされている。では、GibsonはともかくDeLilloやAusterはそうした状況をどこまで認識していたのだろうか。

(3) *White Noise*再考プラス*City of Glass*

*White Noise*では、日常生活の様々なところで人々がコンピュータ・システムにつながっていることが、しばしば語られる。主人公が銀行で残高を照会する際に、自分のアイデンティがどこか遠い都市のメイン・コンピュータにあると意識し、汚染事故の健康検査をきっかけとする死への恐怖は、コンピュータの計算結果によってもたらされ、スーパーのレジでは単なるモノが二進法のバーコードを通じて生きた世界へと立ち上がって行くと、述懐される。これに対して同じ年に出されたPaul Austerの*City of Glass*は、コンピュータが一切出てこないものの、ニューヨークのマンハッタンを舞台にしながら風景描写は皆無に近く、マンハッタンのアベニューとストリートの住所表記でコンピュータのマトリクスのように空間を表現している。コンピュータにからんで時代がはらむ世界観の変化に、DeLilloもAusterも無意識に反応したと考えることも出来るのではないか。

(4) 結論——都市の物理的な意味の無化を描く*White Noise*と*City of Glass*

都市性(Urbanity)はそもそも、物理的な都市が帯びていたものではなくて、人々が集まり様々に交流することでどこにでも形成される「文化」であったはずだ。一方そうした交流の主要な道具であるメディアの技術的な発達、物理的な都市の枠組みを越えて広がることは必然である。郊外化とは、交通網とメディアの技術的な発達に支えられて、都市性を伴った物理的な空間を、物理的な都市の外に形成する現象である。

インターネットの登場は、都市性が、物理的なものではなくて人々の頭の中に共同の幻想として存在するものであること、誰でもがアクセス可能あるいは誰でもが意識することなくその中に取り込まれてしまうことを、眼に見える形で明らかにした。1980年代は都市が新しい段階に入る入り口の時代であったとも言える。

1980年代半ばに登場した現代アメリカ文学を代表する2作、*White Noise*と*City of Glass*は、軌を一にして登場するインターネットのその後の発展を予見するかのよう、都市が物理的な意味を無化していく様を、それぞれのヴィジョンで描いて見せたのではないか。